

平成 26 年 7 月 1 日

京口門だより NO.9

今年の夏は平年並みかやや暑いなどと言ったり、冷夏だと言ったりして、本格的な夏になってみないとよく分からないという苦しい天気予報のようです。しかしながら、熱中症という言葉はしょっちゅう耳にします。昔は日射病とか熱射病という言葉がありましたが、熱中症はそれらを含めてもっと広い内容をふくんでいるようです。

高い気温の環境では血液の中の電解質の乱れから痙攣をおこすような状態になったり、身体の血流が乱れて心臓の働きを悪くする場合、血流や心臓の働きの悪さで身体が疲れ切ってしまう場合、昔に言っていた日射病や熱射病のように体温の上昇が起こって、重篤な状態に陥ることもあります。慢性的に暑さに侵され身体が衰弱してくることもあります。これらすべて熱中症に入ります。

漢方医学ではこうした暑熱による病気を中暑病(暑さに中った病)と熱病とよんでいます。熱病は今日の日射病や熱射病とほぼ同じで、外からの暑熱のために体温があがり、時に死にもいたる状態を指しています。身体の中に熱がこもってしまった状態です。ここまでくると単に水分を取ったり、涼しいところに移動させるくらいでは治りません。身体内部の熱を薬でもって冷ましてゆかねばなりません。漢方ではこの熱病には漢方薬の石膏が入った薬をしばしば用いて治療します。

中暑病は急性の場合は、水分を取ったり、冷所に移動することで治まってきますが、長引いてきますと、いわゆる夏バテとか暑気あたりという状態になり、食欲が低下し、だるさや気力の低下などをきたしますし、ひどい場合は筋肉の引きつれのような状態になることもあります。中暑病といわれる状態には清暑益気湯という有名な漢方薬があります。名前のとおり暑気を清解し元気を益す薬となります。先月も触れましたが、暑気は胃腸の働きを弱った状態してしまいます。清暑益気湯は弱った胃腸の働きを活性化して、いわゆる元気を充実させてゆくこととなります。ですから清暑益気湯は消化機能を活発にさせる六君子湯を基本骨格にして出来上がった薬となっています。

冷夏か平年並みの夏かはっきりしない今年の夏ですが、暑気による病気に漢方薬をうまく利用してください。

